

『鷲林拾葉鈔』記事対照表(三)

渡辺 麻里子

〈凡例〉

一、記事対照に使用したテキストは以下の通りである。

『鷲林拾葉鈔』……日光山輪王寺天海蔵写本

・参照、蓬左文庫蔵写本

・慶安三年刊、版本(『法華經鷲林拾葉鈔』 臨川書店 一九九一年)

・翻刻『日本大蔵經』第二四卷・二五卷、法華部章疏四・五

『一乗拾玉抄』……叡山文庫天海蔵写本

影印、中野真麻理『一乗拾玉抄の研究』(臨川書店 一九九八年)

翻刻、中野真麻理「叡山文庫天海蔵『一乗拾玉抄』(卷一)翻刻」

〔国文学研究資料館紀要〕二五号 一九九九年三月

『轍塵抄』……………日光山輪王寺天海藏写本（渋谷目録、ハ本）（永祿四年（1562）舜雄写、七冊本）

・参照、高野山図書館三宝院寄託写本、書写年次不明、表紙に延深とあり。

『法華經直談鈔』……………叡山文庫金台院藏写本（『法華經直談鈔 古写本集成』臨川書店 一九八九年）

・参照、寛永十二年（1635）刊、版本（『法華經直談鈔』臨川書店 一九七九年）

一、テキストの配列は上より、『鷲林拾葉鈔』、『一乗拾玉抄』、『轍塵抄』、『法華經直談抄』とする。『一乗拾玉抄』の成立は、『鷲林拾葉鈔』より先行するが、『鷲林拾葉鈔』を基軸にするため、『鷲林拾葉鈔』の一段に置いている。

一、一段め、『鷲林拾葉鈔』の見出しは、日光山輪王寺天海藏写本による一つ書きの項目で、〔1〕〔2〕〔3〕として 通し番号をつけた。また参考として、版本の見出し（巻頭ごとの目次による）を添えた（一、二、三……）。

一、二段め、『鷲林拾葉鈔』の記事は、見出しの一つ書きごとくに、さらに記事を細目に分け、それぞれ出現順にA、BC……………と記事に通し番号をつけ、記事の内容の大略を示した。（アルファベット以降は、アイウ……で示した。）記事の内容は、現代語訳で示した。比較の都合上、なるべく簡略化せずに表記するようにした。一、本文における引用について、例えば「記三云……」の場合は、【記三】と略した。

一、三段め『一乗拾玉抄』以下については、記事内容が『鷲林拾葉鈔』と大略同じである場合は、『鷲林拾葉

『鈔』の記事符号ABCで示した。

一、記事内容が、『鶯林拾葉鈔』と若干の相違を有する場合、『鶯林拾葉鈔』の記事記号ABCに対応してA¹B¹C¹等の記号を用いて出現順に示し、内容の差異を簡略に示した。

一、『鶯林拾葉鈔』にない記事については、出現順にabcの記号を付して示した。以降の段でその記事と若干の相違あるも、同意の記事には、前項と同様にa¹b¹c¹の記号を付した。

一、『鶯林拾葉鈔』に対応する記事が、異なる項目の中にある場合、記事の位置を記した上で、内容の対照を行った。

一、『一乗拾玉抄』以下の諸本については、私意に、各々一つ書きに通し番号を付した。

一、人名については、略称など、適宜改めた箇所もある。

一、書名の表記は、なるべく原文を生かしたが、「此経」を『法華経』にするなど、文脈に照らして補った場合もある。

一、和歌は、『鶯林拾葉鈔』では一首全部を掲載し、〈1〉〈2〉〈3〉として歌番号を付した。『一乗拾玉抄』以下は、対応する歌番号を示し、語句の異同を示した。

*、記事対照表の作成にあたっては、市古貞次編『平家物語研究事典』（明治書院・昭和五三年）所収、「平家物語諸本記事対照表」を参考にした。

◆ 序品第一之一 (3)

項目	『鷲林拾葉鈔』	『一乗拾玉抄』	『轍塵抄』	『法華經直談抄』
<p>〔14〕讚歎仏四智 三身五眼功德華稱 揚、供養經、亘一 切諸經 八、大意釈名等事</p>	<p>A、仏を讚歎するは、四智三身五眼功德を挙げて称揚し、經を供養する。 B、一切諸經に亘つて、大意・釈名・入文判釈の三に分別して讚歎を述べ。 C、法華經の大意を判じるに、一切衆生の頓悟の直路、三世諸仏の甚深の秘密の奥蔵である。衆生は法華經を聞かなければ菩提を得られず、諸仏は法華經を説かずに化導することとはできない。 D、法華經は、如来の大事の因縁であり、法王の髻中の明珠なのである。 E、地動放光の現瑞があつても、妙法の宣揚は輒くない。十如の性相を挙げて、諸法実相の</p>	<p>B¹ (12)、諸經の大意・釈名・入文三の文段あり。 a (12)、法華の大意は、万法第一義空の内証は大である。意とは仏意果極の意と云うなり。仏意とは本迹未分の内証、衆生成仏の直体である。釈名とは首題の五字を釈す。</p>	<p>C¹ (14)、大意とは実相の妙法である。実相の妙法とは、衆生の一心本有の三千である。三世諸仏もこの一心を証し、十方の薩埵もこの三千を顕す。成仏と云うも本有の十界なので外に求むべきにあらず。輪廻と云うも已心の地獄なので、遠く厭うべからず。 【大師】この妙法蓮花</p>	<p>×</p>

<p>H、大意について、諸師の釈は羅縷に違がない。</p>	<p>F、敗種永滅の二乗は仏性の蓮華を開き、逆悪断善の類は当来作仏の記別を預かる。五障三従の女人は等正覚の台に上る。法華經の一句一偈を聴聞した人は、当得菩提の記別を蒙る。一念信解の功德は五波羅蜜の修行を超え、五種法師の修行は、六根清淨の果報を得る。如説修行の女人は安楽の往生を遂げ、受持説誦の行者は都率天上の内院に登る。如法懺悔の輩は十種願王の身を拝し、乘白象王の影向を預く。</p> <p>G、凡夫の智慧で一部の大綱を談じてはならない。井蛙の小智で九牛の一毛を述べるようなものである。</p>
<p>×</p>	
<p>×</p>	<p>經、本地甚深の奥蔵であり、三世諸仏の所証得と釈す。</p> <p>b (14)、【五大院先徳】妙法蓮花とは一切如来の微妙の因果、摩訶止観とは一切菩薩の修証の径路である。この乗に乗る者は白牛運載して直に道場に至り、この觀を觀じる者は神通飛騰して疾く宝所に至り、權教の心は心外に仏を求む。故に曠劫多生の間、無量の内頭を修して未来に成仏を期して、法花円經の心は自心本覚の理を読み、万徳円満の性を明かす故に一念須由の間に正覚を成すのである。</p>
<p>×</p>	

I、【玄一】理は偏円を絶ゆとも円珠を寄せ理を談ず。極遠近あらざれども宝所を託し極を論ず。極会円冥して事理俱に寂す。寂せざれば無明の酒に耽れ、珠に繋ぐと雖も覺えず。涅槃の道も迷い、遠からずとも長しと言う。聖主世尊は倒惑を惑し、四華六動して方便の門を開く。三反千涌めば真実の地表れ、一切に見聞を得させる。

J、【玄二】化城の執教を蕩し、草庵の滯情を廢す。方便の權門を開き、真実の妙理を示す。衆善の小行を会し、広大の一乗を帰す。上中下根皆記別を与え、衆聖の權巧を發し、本地の幽微を顯す。故に増道模生、位は大覺の隣となり一期化導の事理供円なり。

K、【玄二】妙法蓮華經は本地甚深の奥藏なり。
【文】是法示すべからず。世間相常住なり。三世の如来証得する所なり。

【文】是第一寂滅なり。道場で知己大事因縁世に出現し、始めて我が身を見、仏慧に入れしむ。未だ入らざる者の為に、四十数年更に異なる方便で第一義を助顯す。

今正直に方便を捨て、但無上道を説くのみ。

シ、【山家釈】大意に、平等大会究竟の一乘は、真実中の真実、甚深中の甚深なり。故に能く四華因門を散じ、法性円珠を酔客に示し、六動を果地に振る。多宝證して云う、皆是真実である。所以あり。

M、伝教大師、九州宇佐宮でこの表白を作り読み上げ給うと神は感動し揺れた。

N、【講演法華義抄】明月の团团たる妙法に依り、その名を点ず。意処歴歴たる蓮華に託し、無垢果を得る。

O、これらの釈は大概一部始終を談ずべし。是を大意と云うなり。

P、実には大は法界の大体なり。意は行者の一心なり。底下薄地の凡夫の一念、法界を周遍し三千を接得し万法を円備す。一多自在なる円融の妙心を以て大意と云う。そこで、止観一部で法華の大意と云う一義の心もこの義である。衆生成仏の直道と云い、速疾頓成と云うも、一念の遍照法界に顯し妙法と名づくるのである。止観一部は法華三昧の筌蹄の釈と思うべし。

〔15〕第二釈名

A、第二釈名とは、妙法蓮華經の題号を釈す。天台大師瓦官寺で八箇年法華を講ずと云うは、玄義一部の講談、妙法の題号を釈す。短少にして卒爾し説き尽くすべからず。只釈義の指南に任すべし。

B、【玄一】妙は不可思議の法を褒美す。又妙は十界十如の法なり。法は妙、妙は法なり。無二無別の故に妙と言うなり。

C、【玄一】秘密の奥蔵を発き稱して妙と為す。権実の正軌を示す故に法と為す。久遠の本果を指し譬えて蓮を以う。不二の円道を会し喻えて華を以う。声は仏事を為し稱して經と為す。円詮の初なり。目して序と為す。序類相従い、稱して品と為す。衆次の首なれば名を第一と為す。この釈に題号の始終を顯す。

A₁ (12)、釈名とは首題の五字を釈す。三大部の中には玄義である。入文は如是我聞等である。

a (13)、法体に約して大意等の三を云う時、万法未分なのは大意千差万別で、柳は緑、花は紅と分けるのは釈名である。互いに依怙依怙となるのは入文判釈である。

* (14・15) ↓ (27)

(15) 次釈名事

b (15)、經教の題号に單三複三、三具足のひとつとて七の具有り。是即人法喻の三の不同に就いての事である。單三とは単に人に從え、單に法に從え、單に喻を從える三である。複の三とは、人法を複ね、法喻を複ね、人喻を複ねる三である。具足の一とは人法喻の三を並べて題するのである。單三の中の法とは、大般涅槃經の題である。人とは仏説阿弥陀經の題である。喻とは(稲麻經である。)次いで、複三の中の人法とは、仏説觀無量壽經である。仏は能説の人釈尊、觀は十六想觀なので法

(12) 第二釈名事

d、是は妙經の題号の五字を釈す。經には題目と為し、仏には眼と云て一部の體体なので法華一部の始終は題号の五字に極まる。

A₂、天台大師は瓦官寺で八箇年の間法華を講ずと云うは玄義一部にこの首題の五字計を釈し我等短才の凡夫として輒く一日片時の間に説き尽くすべからざる事である。

* 以下 (12) ↓ (17)

<p>D、【玄一】妙は妙、不可思議と名づく。法は十界十如権実の法である。蓮華は権実の法を譬う。妙法は解し難し。譬を仮して彰し易し。</p>	
<p>a (16)、妙法は諸法に亘つて、知・不知の二あり。不知の重は妙である。理即の理の体である。是を理非造作等</p>	
<p>D₁ (17) 妙法の二字を【大師(玄二)】妙は妙、不可思議と名付く。法は十界十如権実の法と積す。</p>	<p>である。無量寿仏は又人である。又法喻兼含は今の經(法華經)である。妙法とは蓮花の喩である。人喩とは仏説梵網盧遮那仏、心他戒品とも云う。具足の一とは大方広仏華嚴經である。 * (16) ↓ [27] c (17)、妙法蓮華經の題は、法喻兼含の題である。是は蓮花は譬喩の蓮花と意を得る時の事である。当体の蓮花と云う時は五字ともに単に法体に従う名である。</p>
<p>D₂ (13)、妙と云うはいかなる物ぞと云うに、【天台御釈】妙とは妙名不可思議と積</p>	

E、妙は能嘆言褒美の義である。法は所嘆の体実相の玄理である。法華の実相は言語道断不可思議なりと讃えて妙法と云う。大方物を嘆ずるは実体を挙げ実相玄妙なりと称歎すべき故法妙と云うべし。言便に従い妙法と云う。不思議と云うは如何。意を得べし。

F、【釈(記三)】不思議は不決定である。

G、権は權に留めず実である。実は実に留めず權である。十界十如互いに具足して九界迷妄の上にも極朗然大覺の悟を如来内証の境界にも煩惱生死惑障を捨てず、迷悟一如生仏不二なる處を不思議と云い不決定と云う。このように談ずるは尚教門である。是実の不思議なり。

H、一念不起の本源は妙三千事の法法は法である。妙は三千、三千は法と釈し、三千は

々、是を妙法不可思議なり。法の体である。十界十如權実の法である。

E₁(17)、仍て妙は不可思議言語道断の義を歎美する言である。法は界如三千の法体なので所歎の実法である。一部の始末八軸の前後の文文句句併ら此二字を出さず、品品の内咸具等句の下通結妙名と釈す。所詮広言して十界三千の依正妙法にあらざる事無し。略して我等が一心一念悉く妙法の直体である。抑も我等が一心を何故妙と歎じたか。

b(17)、【金鉉論】実相必ず諸法、諸法必ず十如、十如必ず十界、十界必ず身土と釈して十界十如一心一念の上に円融圓滿してしかも互具互融する處が妙法にて有る。

E₂(13)、妙とは能歎の言、法とは所歎の体である。その理由は十界十如の權実諸法において言語道断なり。さても不思議にして妙なる物かなとホメタル言である。

E₃(13)、妙とは歎ずる言、法とは歎ぜらる意である。

c(13)、何故歎と云うか、地獄・餓鬼・畜生

一念に居り、三千の差別歴歷たる処を妙法と云う。止觀の心は理非造作故に曰く、天真なるを妙と云い、證智円妙なる故に云い、独朗なるを法と云う。真如の不變を妙と名づく。法性の隨縁を法と稱す。止觀の二法寂照の二徳、色心の二法を妙法の二字に収む。

I、山家在唐の相伝には、一字二字の習と云うこと有り。一字は妙、二字は妙法である。

J、【玄一】心は幻炎の如く、但名字有り。名付けて心と為す。適々其有を言いて色質を見ず。適々其無を言いて慮想を起く。有無を以て思度すべからず。故に心を名付けて妙と為す。妙心可軌なり。稱して法と為す。心法因ならず果ならず。理の如く觀じ因果を弁す。是を蓮華と名付く。一心に觀を成すにより教余心を轉ず。名付けて經と為す。

・修羅・人天等の十界の諸法の有様を見れば、言語道斷の心行所滅して言で説き尽くすべき様もなく思惟を以て思量するべき様もない。故に如来も手を打つて妙なる物かなと歎じた言である。

d (13)、このように十界の諸法を不思議にして妙なりと歎ず子細を申すと、十界の有様は、只何事も不思議なる計である。その故は、先本覚真如の重には寂然として一物もなし。空々寂々として只偏に虚空の如し。そこに一法起こり始めて以來、次第相統して、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天と顯れて十界の作業を相分けた。これにより

K、【籤】今円一心の三幻を説くにより一心の三惑を破す。理惑体一にして境智如如たり。適言下は観法心性、観じては但名字有り。有を言えば則ち一念都て無し。況や十界の質像有るや。無を言えば則ち三千の慮想を起く。況や一界の念慮や。この有無を以て思ふべからず。一念の心に中道冷然たり。知心妙なり。妙即三千、三千即法なり。法故三軌、故に可軌と云う。この心法因ならず果ならず。因果所依の体を挙げ理の如く観ず。この語よく因果の観を取る故に名付けて体と為す。体家の宗用は但是宗と体との巧能なり。因は華、果は蓮なり。この故に名中に本より三義あり。

L、この釈観心に約して題号を釈すなり。相文に顯然なり。

文句の序には至理無名なれども名は四天下に流れ、真乗動かずとも動じて三界の中に出づ。至理無名の重には、仏衆生と云う名を絶つ。真乗不動の古へは、地獄極楽と云うことも無し。動じて三界を出る時、浄土も穢土も分かれ名は四天下に流れて後仏とも衆生とも名は起る。仍て本覚真如の昔を云えば空々寂々として一法不可得なれば、有無を以て是非すべき様も無し。また忽然念起して後、十界の衆生と顕居て己々の業を作し居る事は誰か教とも云い難し。又本覚真如の内証よりは何なる因縁に依つて一法起り始めてから十界

×	
×	
×	
<p>g (13)、十界色質の相を分れる上に、 地獄は、炯燃猛火に肉を焼き、餓鬼の 飢饉に身をやつし、畜は食害、修羅は 鬪闘、人間は八苦、天人は五衰を悲し</p>	<p>e (13)、【世間語】面白 や実相無漏の大海に五 塵六欲の風は吹かねど も随縁真如野波の立た ぬ日もなし。 【釈】性海風無れども 全波自ら動くぞと云 う。是非分別に及ばざ る事なれば、所詮は不 思議にして妙である。 f (13)、【弘法大師歌】 法性の室とは聞けと我 がすめば有為の波風立 たぬ日もなし</p>

む。仏菩薩は紫磨黄金の肌を研ぎ、自在の徳を振舞う。十界の作業は人天修羅造作にもあらず、仏菩薩の所作にもあらず、唯自然の振舞である。

h、花に鳴く鶯、水に栖む蛙は春を待ちて音を鳴き、草葉に数多来る虫の声、遠山に鳴く鹿の音は必ず秋を得て声を出すのは何時の約束と云う事を知らず、畜類も鳥類も己己の所作を少しも違わず作し居る事は誰が教えたのか。

i、非情の草木も上にも青陽の春の朝には花は紅の色を開き、柳は緑の色を顕し、夏は重ねて梢となり秋来たれば紅葉せよ、冬には落葉せよと誰が教えたのか。誰かが教えたならば、三世に渡つてこの振舞と続けることは難しい。

j、春夏秋冬の四季の転変の有様を見るに、春は陽気、夏は炎天、秋は長夜、冬は寒気、この振舞は三世常住にして年々少しも替わらない。誰が教えたのか。

k、【古歌】偽なき世なりけり神無月誰か誠より時雨そめけん

l、所詮此の振舞は真如随縁の功德とし

て法爾自然の有様である。此も言語で計る様もなければ言語道断不思議の妙と歎ず。

m、十界の色質は各別に分れて有れども諸法は無自性にして決定の性なければ一界に留まる事も無し。善悪因果は歴然として業因感果は決定する。破戒の罪で地獄に堕ち、慳貪の業で餓鬼道に趣き、慚愧心無ければ畜生道に趣き、瞋恚の煩惱によつて修羅道に趣き、五戒を持ち人間に生れて十善を修して天上に生まれる。一界に留まることなく業因に依つて様々に生を受け替わる。

n、龍樹菩薩の言には、世界は車輪の如く変わる。車輪の下、上、十二因縁の流転の有る様は車輪の廻る如し。鳥の林に遊ぶが如し。十界各別なるは地獄から仏性、業因感果は必定である。業因感果は決定して善悪の因果を振舞たる有様を如来の内証から見れば、言語道断不思議の妙である。

o、十界互具足の事。「釈」阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し毘盧の身土は凡下の一念を踰ばず。衆生は発心修行

して成仏すと云えども衆生の界滅ずることなく仏界の増す事も無い。不思議の妙なり。

P、【古歌】流れては本の水にも非ずかな唯人の世を渡る山川

Q、十界の諸法は一法として常住なる法は無い。

R、【空也上人歌】世の中に独留まる者あらば若我かはと身をや頼まん

S、世間に生を受ける者は皆死に帰し非情草木までも常住なる者は一つとして無い。

t、【金剛經】一切有為法等。

u、一切有為法は夢幻の如し。唐の呂西は夢に帝と成り五十年の間公卿大臣に敬われたが、夢覚めれば枕上の一睡であつた。莊周は夢に胡蝶と成り、百年の間花の上を飛び回っていたが、夢覚めれば実体は無かつた。世の中はこのようなものだ。十界の諸法は有物と云わんとすれば一法として常住なる物は無し。無き者と云わんとすれば、衆生界万々として尽きる事無し。有にもあらず、無にもあらず、不思議なり。

<p>x</p>	
<p>a (17)、妙法法妙の次第に名義の便りと云う事有り。名の便りは利根の機の為に、義の便</p>	
<p>d (17)、始め、地獄の洞熟猛火の涅槃の座にも三身円満の大果を具足し、終わり、仏果の</p>	
<p>(14) 妙法と法妙の次第事 a, (14)、妙法蓮華經と法妙蓮花經と二の次第が有る。 【天台御釈(玄義一)】妙法と</p>	<p>v、【古歌】手にむすぶ水に宿れる月影の有か無かの世にも住むかな。水に宿る月影は有と云えば実体がなく、無いと云えば目の前に月影は宛然としている。一切諸法も此の如し。 w、我等が一心に約せば、【玄義】心は幻炎の如し、名字にのみ有り。適其の有言すれば色質見え、適其の無言えば復三千の慮相起きる。有無を以て思い慮すべからざる故に心を名付けて妙と為す。 x、所詮隨緣真如縁起常住の功德にして法爾天然の振舞なれば言語道断、心行所滅して不思議なる物かな。嗚呼妙なりと如来も手を打って歎じ給う。仍て妙は能歎の言、法は所歎の言と積する事、この故である。このように心得れば我等が無始の色心、生死輪廻の有様を妙なる法かなと説き給う。</p>

りは鈍根の用である。
b (17)、「尋ねて」妙法

と次第する証拠は何
か。「義」方便品に云
く、我法妙難思文、

【釈】法既本妙等と。

c (17)、「尋ねて」羅什
は何故妙法と次第し法
妙としなかつたのか。
【義】どちらもあるが、
羅什は存略としたので
はないか。

紫摩黄金の台の上にも
三途八難の苦報も誦さ
ず。権実不二因果同時

なる処が妙である。九
界の権は権に留まり、

仏界の実は実に留まる
ならば妙にては有るべ

からず。権も実も中懸

からず。因果不二一体

なれば不思議の妙法で

ある。故に本来仏の深

旨妙法等の五字に題し

当体即理の実義、本述

の両門に尽きる。

e (17)、「仍て梅花一点

開けば三千別界悉く春

を知るが如し。妙法一

度顕れば十界悉く成仏

の道となる。

f (18)、「又妙とは不思

議言語道断の義なので

不生の義である。法と

は十界十如因果同時の

姿なので、差別皆品で

次第し二卷已下には法妙と次第
する。その故は、妙楽は妙法の

名の便り、法妙は義の便りと釈
した。

j (14) 譬は物を讃じるに面白の

月やと云えば讃じる言は先に有

て、讃じられる月は後に在る。

また月の面白さよと云う時は、

讃じられる先に月が出て讃言は

後に有り。その如く、さても面

白十界の有様かなと讃じる時は

妙法と次第し、十界の諸法の有

様のさても面白さよと讃する時

は法妙と次第する。故に妙法・

法妙の二の次第何も相違無し。

k (14)、「妙楽大師が名の便り義

の便りと釈したのは妙法と次第

するは名の便りと云うは、この

経殊勝に貴き事は名先立て聞く

ことを顕す。故は何か知らず先

に妙なりと云い出すは頓て早こ

の経の貴き事が名に顕れるな
り。法妙は義の便りと云は、物
を讃ずる道理は先にその事を云

ある。此妙法は我等が
色心の異名である。心
に約せば一心不生で万
法に咎無く、思想箭量
を絶え、念寂靜なる処
は妙である。

g (18)、対境して桜梅
桃李紫蘭黄菊と念じ、
恒起するは法である。
色法に約せば五体身分
の不動転なるは不生の
形妙である。去來座立
する処は法である。

h (18)、正報の名生に
約せば此分である。依
報上に約して意を得。
桜梅桃李の花転じて天
人修羅の道仏にあら
ず。仏菩薩の染にもあ
らず。自天然の法性な
る処は常住不変にして
妙である。

i (18)、事々物々独朗
の智用を吐き、差別し

い出してその花こそ面白けれ、
この花も面白やと讚するのであ
る。故に法妙は義の便りと釈す。
l (14)、【一義】には、仏意機情

の両辺と成る。故は、仏意の内
証に約せば、妙法と次第するの
である。即ち如来の内証は十界
の諸法において是も非と義味を
付せず唯打ち向きて妙なりと照
覽する故に妙法と次第する。衆
生の根機に約せば、先十界の諸
法に付いて地獄は炯然猛火に身
を焼き苦患の処である。仏果は
紫磨黄金の粧にして殊勝なりと
分別して修行の劫を積みて後諸
法不思議にして妙なるを悟処を
法妙と次第する。

m (14)、玄義一卷は仏意略釈な
れば妙法と次第し、二巻以下は
機情の広積なので法妙と次第す
るのである。仍て今の経は如来
の御内証を本として妙法蓮花経
と次第するのである。

<p>〔16〕付此妙字玄 文相待絶待二妙立</p> <p>九、相待絶待事</p>	
<p>A、妙の字について、『玄義』相待・絶待の二妙を立てる。相待妙とは三教の龜に対し完全な妙を顕じ、四味の權に対し一実の真文を開く。諸經は皆權なり龜なり。法華は妙なり実なりと称歎するを相待妙と云う。絶待妙とは、開權顕実諸法皆体なれば、五時八教悉く一大円教の妙法に歸して</p>	
<p>×</p>	
<p>×</p>	<p>居たるは法である。仍て妙法と云うも実相と云うも実に心外に求むべからず。迷は目前にして見えず、心中にて知らざるなり。覚悟の知見は本来具徳である。三世十方の諸仏は大非の余りに無言說法の中に仮に言説を立つ。文字無き中に仮に文字を借りて妙法と説き顯す事である。</p>
<p>×</p>	

	<p>〔17〕付此妙本迹 各釈十妙</p>
<p>余法を見ざる所を絶待妙と云う。 B、三説の狭量葉王の十喻などは相對妙の證、十方仏土中に唯有一乘法と説き、諸法実相と宣ずるは絶待妙の拠なり。</p>	<p>A、妙について本迹各十妙ある。又百二十重の妙を立つ。本迹二十妙を心仏衆生の三法妙に置けば六十なり。各々相待・絶待の二妙を具して百二十の妙なり。 B、前唐院大師は千五百妙を釈した。これら皆作事教門なり。 C、実には三千不思議の妙なれば、更に數量を論ずべからず。</p>
	<p>A₁ (18)、妙に本迹の廿妙・百廿妙、或いは三千の妙、或いは三万の妙を立てる。法には南岳は心仏衆生の三法妙を立てる。 a (19)、法の字はノットルと説む。心はノットルは色法である。仍て妙は心、法は色である。妙の心とは息風である。息風が動き働く間、修性不二の三千と口伝する、この息風が十界を生ずる故に、十界も一心と云うのである。この色心を妙法と知れば悟である。迷いを知らないのである。 b (19)、【和泉式部の歌】妙は只だ八卷が名には限らじな松竹桜当位即妙、【同歌】法界を只だ一</p>
	<p>×</p>
	<p>A₂ (13)、先ず妙の一字に付きて天台は本迹に亘つて二十妙を釈す。委く是を申さば天台の本書を説誦するにして今の直談には似相ざる故に之を闕す。 *以下 (13) ↓ (15) E</p>

念と見る時は知一切法皆是仏法。
c (20)、三千妙の事。十界互具すれば百界である。百界に十如を持って千如である。これを陰生土の三世間に持てば三千である。是が三千の妙である。十界は華嚴經に出ている。十如は法花に出て、三世間は大論に明らかである。

d (21)、八万四千の妙とは、薬師・法花は一体である。薬師の十二神に各々七千の夜叉眷属がいる。是を合わせれば八万四千である。これを仏果に約せば八万四千の夜叉である。衆生に約せば八万四千の塵劳である。法に約せば八万四千の文字である。法花の意は人法不二三宝一体の故に八万四千の妙と云う。

e (22)、心法の体はどうであるか。【義】取り柄も無く、善悪無起の三生に折れず、不思議不可得である。

f (22)、【華嚴經】、心如工画師造

<p>〔18〕付此妙字難 立本迹二十重妙、 法但立三法妙一種</p>	
<p>A、この妙の字について本迹二 十重の妙を立つと雖も、法に は三法妙の一種を立て、別の 本迹を分けざるなり。妙は敷 の言なれば、教門に付き本迹 を分かつなり。法の法体は始 め本を離れ本迹を絶える故、 二門の異を分けざるなり。</p>	
<p>×</p>	<p>種々五陰。十界の形状は心法のことわざである。 g (22)、【一家】心は幻炎の如し。 h (22)、【天神歌】心こそ心まよ わす心なれ心に心心ゆるすな i (23)、人身に生を受ける事は、 海中に針を置いて、梵天より糸 を下ろし通そうとするよりも難 しい。 j (24)、無漏の善とは、経を読み 念仏を申すを云う。有漏の善と は、堂塔を立てるを云う。有漏 無漏の不同あるが円の心は善体 本妙と談ずる故に何れも仏因と なる。</p>
<p>×</p>	
<p>×</p>	

〔19〕蓮華事

一〇、蓮華事

〔19〕蓮華の事。
 A、妙法の不思議を顕する為に、譬を事相の蓮華に仮すなり。一切の草木は華洛後菓成なり。蓮華は華菓同時なり。妙法の法体は因果不二權実不思議なるに譬う。
 B、蓮華の譬喩は上成の如し。【玄義】妙法は解き難く、仮譬は顕じ易し。
 C、華草の蓮華の花菓を同時に妙法の因果同時の法体を顯す。
 D、法の蓮華とは、【玄義七】依正因果は悉く蓮華の法なり。
 E、森羅万像は皆因果を具し蓮華と云う。劫初には諸法に千の名字あり。世濁世に下り他人の根鈍に成行く故、皆忘れ、今但一法に一名字のみを知る。千の名字中に蓮華の名有るべし。故に諸法は蓮華の名

a (25)、蓮華の事は余抄の如し。蓮華に三の異名が有る。一に峴摩羅。未敷蓮花である。二に迦摩羅。開敷蓮花である。三に盆陀利花。花開き盛るを云う。或いは蓮花を最香とも云う。
 b (26)、蓮花を医書には蓮肉と云て、水の底に万劫を経ても朽ちず、左右無く出生せず不思議の縁に生れる。釈に石根と云う。
 c (27)、蓮花を狂花無菓と云々。狂の字をタクラタと読む。天竺にタクラタ木と云う木の花が落ちて人の目鼻に入つてムツカシキ事である。この花とタクラタの花と云う。

(19) 当体・譬喩の蓮花
 d (19)、蓮花に当体・譬喩の二義有り。法説の声聞は当体の蓮花を悟り、譬因縁の二周は譬喩の蓮花を以て開悟する。
 e (19)、先ず当体の蓮花とは法花三昧の清淨微妙の法門である。此実相の妙法は權実同時因果体一なる処を蓮花と名付く。今蓮花の称、仮喩にあらず、法花の法門、法門清淨にして因果微妙である。此法門を名付けて蓮花と為すと釈す。法花三昧の法門とは我等が一心一念の異名である。妙法蓮華經の五字併て一心全体の名称と意を得べし。

(15 a) 当体・譬喩の二義、蓮花三徳事。
 d、蓮花の事に付いて、当体と譬喩の二義が有る。先ず譬喩を云うに蓮花と云うは、【玄義】妙法は解し難く譬を借りて顕し易しと云て、妙法の難解難入にして不思議なるを顕する為に譬を事相の蓮花に借りる。故に妙法は法体、蓮花は譬である。
 A、(15)、余の草木は花が先に開いて後に菓が成るのである。蓮花と云うは花が開くに応じて中に菓も顯る故に同時なり。法華以前の諸經の心は、因位の修行を積んで後仏果に至る。草木が先に花開き

なり。又劫初に大海に一華開く。其の相花莫同時なり。梵王これを蓮華と名づけた。故に諸法因果を具足する物を蓮華と名づく。

F、当体蓮華とは、【玄七】蓮華は譬にあらず。当体の名を得る。

G、つまり肉団八葉蓮華である。

H、【菩提心論】八葉白蓮一肘間。

I、【山王院】阿字不生微妙体は即衆生内心の法、本来清浄

B¹ (19)、譬喻蓮花とは【玄一】妙法は解き難く仮喩顕じ易し。釈して妙法不思議の法体三千互具にして易も九権一実の善相歴然なる処を解し難い者の為に池中の花草蓮花の花莫同時にして而も泥濁に染まらず比す。一切衆生の心性に本来三身の功德を具足する。是が煩惱の汚泥に処すと雖も所染無く清浄微妙の功德である。

f (19) 【蓮花三昧經】
婦命本覺心法身常住妙法心蓮台本来具足三身徳三七尊住心城等述べている。

H¹ (19) 【真言秘教心】八葉白蓮一肘間炳現阿字素光色と述べて衆生の胸中の八分の肉団に

後菓の成る如し。法華經の心は因果同時に明ず。因位修行の処に頓じて成仏の功德を顕す。【經文】須臾聞之即得究竟と説く。この經を聞く処に頓じて仏果究竟する。故に蓮花の花果と同時であるに譬える。

F¹ (15)、当体蓮花とは、【一經の文】一切衆生八葉蓮花、男子は上に向かい、女子は下に向かう等と云て我等衆生の胸中に蓮華の如き物があり、医道には心臓と云う。是が蓮華の正体である。

H² (15)、【真言】八葉心蓮華と云う。即ち八分の肉団である。蓮華の正体である。この蓮

蓮華の如し。故に妙法蓮華經と題す。

J、一肘は一尺八寸なり。六寸に渉る物は、円は三倍して一尺八寸なり。

四仏四菩薩座す中台は、大日覺王の安処したまう。本来清淨の功德微妙の法体である。g (20)、【山王院大師(玄義略要集)】蓮花八葉は八教蓮台を表す。唯一表八帛一と釈す。方便の古は衆生の心蓮を八教に開き、遙々の根性を調べ、眞実の今は肉団の八分を首題に顯し、成仏の素懷を遂げさせる故に法華の卷軸を八卷とする事尤も謂われ有り。法喻兼含の經題と有る。

h (21) 【秘教心】仏蓮金の三部を立つ。仏菩薩は内王である。その中の蓮花部の統領尊は觀音である。彼の種字はア字である。三摩耶は蓮花である。妙の梵

華の上に十界の衆生が居る。中央の蓮華台には十界中の最初の地獄界と九界の末の仏界が居る。

j 【金鉤論】阿鼻の依正は全極聖の自身に処す。毘盧の身土は凡下の一念を逾さず。

k、八葉には残りの八界の衆生が居る。

f、【蓮華三昧經】帰命本覺心法身○住心城と説く。

l、【仏藏經】仏見一切衆生心中皆有如來結跏趺坐。

m、世界国土建立の初めは劫と云う。この劫初に大梵天王出て一劫の物の名を付けた。その時大海の中に花草同時なる草花が生出、大梵天王是を見て聖人觀理

<p>三徳 〔20〕於此蓮華有</p>	
<p>〔20〕蓮華に三徳がある。 A、一は淤泥不染とは真如仏性の理、煩惱生死の淤泥に染まらない義である。是を在纏妙法と名づく。 B、【経云】蓮華は水に在るが如し。 C、【論云】蓮華は泥水に出づ。 D、【古今集】蓮の葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉と</p>	
<p>×</p>	
<p>×</p>	<p>語も薩字である。故に観音妙法体同と云う。尤も深意がある。 i (22) 唐の周茂叔という儒者が、廉溪先生が蓮に君子の徳があると愛していたと云う。晋の陶淵明は菊を愛し、世人は牡丹を愛したが、予は独り蓮が泥から出ても清蓮で染まらないのを愛した、という話。</p>
<p>(15 b) この蓮花に付いて三徳がある。 A、一には淤泥不染徳である。その故は蓮花と云うは泥濁の中より生出しても濁水に染まらず清浄無染にして深い色を開く。我等衆生は生死煩惱の中の泥濁に有り難きが内証に備</p>	<p>准例作法名と云いて、理を觀じて道理に依つて名を付けた。衆生の胸中に有る自性清淨の妙法の心蓮華に似ていたのでその草花の名を蓮華とした。蓮華が泥に染まらず、衆生の胸中の心蓮華も淤泥に染まらない自性清淨なることを知るべきである。</p>

<p>〔21〕以非蓮華余 譬顯妙法耶事</p>	
<p>A、【釈（玄一）】蓮華になければ、妙法の譬え無し。 B、今經に七喩を挙げ、悉く妙法を譬える。蓮華は総譬、七喩は別譬である。三千の依正は皆蓮華の意を得る。前には</p>	<p>あざむく（遍昭僧正） E、二に種子不失は、一句染神微劫不朽の義なり。 F、三に因果は同時の義なり。</p>
<p>×</p>	
<p>a（23）、【玄義一】本迹の六譬。本迹の六譬を挙げて、一に狂花無菓を柳菊等の無取果に譬う。二に花多果。三に</p>	
<p>×</p>	<p>処の仏性は生死淤泥に汚れず、煩惱の濁水に染まらざるなり。 B、【經】不染世間法如蓮花在水。 D、【小町歌】蓮葉の濁にしまぬ心持て何かは露を玉とあざむく。 a【後唄】処世界如虚空如蓮花不着水心清淨超於鬢首礼無上尊 E、二には種子不失の徳である。 F、三には花菓同時である。 *以降（15）↓〔19〕</p>

<p>〔22〕法説開悟声 聞用譬喻蓮華耶事 一一、法説開悟機 用譬喻耶</p>	
<p>〔22〕法説開悟の声聞に譬喻を用いるかという事。 A、今經の心は譬喻の外に法體を求めない。事理不二、法譬一如である。故に法説開悟の人に譬喻の蓮華を用いない。 B、【法華經】その証拠に、優曇華の如くという。 C、【釈（玄七）】蓮華を以て釈すと言う。</p>	<p>蓮華の大車、蓮華の宝所有るべきである。 C、【釈（玄一）】妙法にあらざれば喻蓮華を仮すこと無し。 D、爾前の諸經に多蓮華の譬あり。不待時の法華の心である。 E、蓮華三昧經は寿量品の同本意訳である。</p>
<p>×</p>	
<p>×</p>	<p>多花一果。四に一花一果。五に前果後花。六に前花後果。 b (24)、本迹の六譬は、一為蓮故花を実の爲し權を施るに譬う。二花敷蓮現を開權顯実に譬う。三花落蓮成を廢權立実に譬う。以上迹門三譬である。四五六本門の三譬である。その心は上の問權実と本迹との不同計である。</p>
<p>×</p>	

〔23〕安養界蓮華所成国土也

〔23〕安養界は蓮華所成の国土である。

A 【法華經・提婆品】若在仏前蓮華化生。【法華經・藥王品】生蓮華中。【或贊】この界一人仏名を念じ、西に方便一蓮華有り。

B、これらの意から思うと、弥陀の妙法は一体異名である。

C、観音大士は右手に蓮華、左手に施無畏印を結ぶ。これは妙法蓮華を一切衆生に施す為である。

D、【高野大師釈】妙法蓮華經は自性の秘名を表し、淨心の密号を示す。人に約して観自在王と名付け、法に約して蓮華三昧經と名付く。妙觀察智は諸法を簡ぶ。文殊師利は平等慧に居る。

E、【有秘釈】菩薩蓮華の因を修し蓮華果を感ず。

F、蓮華因は一心三觀、蓮華は

×

×

a (16)、西方極樂は蓮華所成の国土である。極樂には九品の不同があるが何れも蓮華の中に託生す。

b、蓮華は妙法蓮華と云う意である。即弥陀法華一体の故である。法華の功用に依つて極樂に往生して蓮華の上に托生し、称名念仏の功力に依つて極樂で法華經を聴聞する。

c 極樂の九品の不同を得べし。上品上生とは、譬えば都に内裏の帝王の御座す御近所の如し。本仏弥陀如来の常に在す所である。此には大乘修行の人が生る。下品は譬えば奥田舎の如し。一文不通の道俗男女が生る。極樂に九品の異なる事は娑婆世界の衆生の所作善根に淺深の不同があるからである。

d、【觀經】上品を説く一は慈心不殺具諸戒行、二は誦誦大乘等と説く威儀乱れずこの大乘法華經を誦誦する人は直に上品上生に生じて弥陀如来の御近辺に有る。下品下

無作三身である。所詮、弥陀・観音・妙法は一体異名にして鎮に衆生の心蓮に居り自性常住の徳を顯ずるなり。

生は或有衆生作不善行見金蓮華猶如日輪、即得往生と説き、極重悪人を知識の教に依つて往生す。

^e、この金蓮は阿弥陀如来の所座の蓮華即妙法華なり。かの人極楽に往生して十二大劫を経ると説き上品へ参ること叶わず蓮華に托生する、此は弥陀法華本来一体なり。

(17) 經文に翼と成る夢のこと。

^f (17)、唐の并州では七歳から善根を積む。僧円という行者は法華の一部を毎日千日説誦した。有る夜の夢に我が両脇から羽が生え、法華の文字と思ひ極楽へ飛ぶと思ふと大きな蓮の上に居た。羽の經文は皆悉く丈六の仏と成つて千葉の台に座すと見えた。弥陀と法華は一体なので、説誦によつて往生したのであつた。

^g、首題の蓮華は【玄義】依正因果悉此蓮華法と釈して、依正の上の本有の因果を顯ず。依報の草木も種子を下すは因の義萌え出るは果なり。春花開くは因、秋の菓を結

<p>〔24〕首題蓮華五色中何耶事</p> <p>一一、首題蓮華五色中何耶</p>	
<p>〔24〕首題の蓮華は五色の中の何色か。</p> <p>A、三井と山門に異義がある。三井は多く青色と言う。五色の中に青蓮華が勝れているからである。賢聖の出処でなければ青蓮華は生じない。</p>	
<p>a (28)、蓮花の色を諸色相違無しと云う。その理由は、蓮花が生まれた始めは青色、成長してつぼむ時は黄色、花開いて盛りの時は赤色、花が落ちようとす</p>	
<p>×</p>	
<p>(16)蓮華色の事</p> <p>A、三井山門の異義。三井は青色。</p> <p>B、【大論】観中には空観第一……首題の蓮華も青色なるべし。</p> <p>C、【一義】赤色の蓮</p>	<p>ぶは果なり。これ本有の道理である。</p> <p>h、安養浄土の台の上には必ず成仏の菓拾うべきなり。</p> <p>(18) 因果撥無悪見の事</p> <p>i、【物語】昔、百丈禪師の話。世間出世共に因果は大事である。或人が仏法に因果があるか尋ねられて知らないと答えたために、五百生の間野干の身を受けた。大智律師に会った時、同じ問をしてもらい、因果は有ると答えると、野干の身を改することができた。因果の道理はよく知るべきである。因果撥無の見外道と云うことである。</p>

B、【大論】観中には空観が第一である。華中では青蓮華が第一である。また、仏の眼を讚する時も、青蓮慈悲の御眸と云う。眼は青蓮華のごとし。法華三説は諸経に超過して最頂で、尤も青蓮華とすべし。C、また赤色という説がある。妙法の題号を薩達摩芬陀利伽索多覽と云う。芬陀利華は赤色だからである。

D、山門の通途義は白色である。白色は諸色の根本で法華は諸教の根源である。本理無染の真如の故に白色なのである。E、【法華経】序品で放光を白毫光明と説く。譬喩品に大白牛車と説く。また普賢の所乗の象は白象王である。

F、【菩提心論】八葉白蓮一肘間、阿字素光色を現す。

G、【釈（弘七）】諸色中の白色は本と爲し、白色は根源とも釈す。法華は迷悟根源果徳の

る時は白色、地に落ち
ては黒色である。

b (28)、我等も生まれ
る時は青色、胎外では
黄色、一日二日過ぎて
湯をかけ水をかければ
赤色、一歳二歳より老
年の間は白色、死すれ
ば黒色である。

c (28)、四季の時は、
春は青色、夏は黄色、
秋は赤色、冬は白色、
土用は黒色である。

d (29)、依法正法常宣
妙法なので、万法皆十
如を具す。まず蓮の実
の黒は如来の相なので
如是相である。黒い実
を砕いて見れば白い。
蓮に生ずべき性なので
性如是である。蓮の性
から形青く生くべき体
は体如是である。この
黒白の性に依って石の

華と云う事がある。そ
の故は赤色は人の意に
催すなり。智慧の義で
ある。法華経とはその
智慧門難解難入と説き
て智慧を説くものなの
で、首題の蓮花は赤色
なるべし。法華の題号
は梵語で薩達摩芬陀利伽
索多覽と申す。道朗に
芬陀利伽を赤色の蓮華
と翻す義がある。

L、【三井一義】黒色
蓮華。黒は諸色の究竟
の姿である。法華経と
は一化の周窮五時の終
卒と定める。如来一代
の説法の究竟の経なの
で、諸色の究竟である
黒色に成る。黒色は、
他の青黄赤白の四色に
成ることは無い。法華
経の一文一句も心符に
染めれば再び三途八難

理本で白色の義は相叶う。

H、【大論】では槃若の空觀を申す故に畢竟空を称して第一であるとする。青色は智門を表す故に般若の智慧を歎じて青蓮華を第一とするのか。中道法身の妙理本理は無染の体に約す時は白色と申すべきである。

I、【或一義】法の相生を云う時、三觀は空仮中と次第する故に、空觀は最初なので第一である。五色の次第を云う時は、青黄赤白と次第し、青は初めて第一である。

J、仏の眼目を青蓮華に譬える事は、慈悲の門深方約である。人を憎む時白眼で見える。愛する時は紺目で見る。仏の無縁の慈悲は本体白色であるが、慈悲深き故に青蓮華に譬えるのである。

K、所詮三義には相違なく、理解すれば、法華は三身即一の

中から時剋到来して出生するは力如是である。

生ずれば蓮花の形を作るのは作如是である。形を作れば花の因に報いて実の体を生ずれば報如是である。このように本性相に還るを本末究竟と云う。所詮蓮の実の息が蓮と成るのである。生ずる時は全体を本として蓮の様に生まれない。衆生の息が衆生と成るのである。起是法性起、滅是法性滅。

e (30)、蓮華に言の蓮華と云う事がある。

【玄一】劫初には万法無名。時に聖人出て如何と名を付けようと思ふ時、天に声があり蓮華と呼んだ。

f (30)、蓮華と云うは

の余界に移ることは無し。諸色に移らないのが黒色の蓮華である。D、山門通漫の義は白色蓮華である。

【釈】諸色中で白色根本と判す。

E1、序品の放光。譬喩品の大白牛車。勸発品の普賢の乗り物の白象。一經の始終が白色で本と為す。

F、【菩提心論】八葉白蓮一肘間。

k、【真言教意】白蓮華を以て本と為す。白色は本理無染の真如、清淨微妙の色である。

1、妙法心蓮華とは、煩惱の淤泥にも染まらず、生死の濁水にも染まらず、清淨無染の蓮華である。白は根本である。譬えば白布を青

經王、三諦円融の妙理である。法身本有理に約せば白色、智門に約せば青色、応身に約せば赤色である。赤色は人の心を催す慈悲の義である。赤色は必ず人心を動かす事、専ら慈悲門である。

【三井一義】黒色と云う義がある。黒色は諸色に尅体して余色が移らない。諸色を究竟する姿である。法華と云うも一化の周窮、五時の終卒なので黒色とすべきである。

M、五色未分の蓮華とすべきである。機に随い縁に対し一辺を顕すのである。法華は乳酪生蘇熟蘇等の四味を合わせた究竟の醍醐である。教に約す時は四教一念にして三諦円融なので、青黄でも赤白でもない。衆色具足すべきなのである。

N、【私】機に対して相違無き事は別紙に有る。

因果の振舞なので、名に従い名を付けるべきだと考えた所、聖人観黒只例作名と釈す。是を言の蓮華と云う。蓮華とは一切衆生の舌根である。

g (31)、言の蓮華を観音品に置き一文を勘じて観音の尊形に習合する時、一心称名観世音、皆得解脱の一文である。一心称名と云うは舌根のハタラクである。これに依つて得た解脱である。是を尊形に習合する時、一葉の観音と習う。一葉を所座とする世間に有るべし。

h (32)、観音所持の蓮花に未敷蓮花は因果一如、開敷蓮花は因果各別を顕す。

が好きな人には青く染め、赤が好きな人には赤く染める。一仏乗の法華経は、人の好みに従い分別して三教と説く。声聞の修行を好む機の為には四諦の修行を教え、縁覚の道を好む機には十二因縁を教え、菩薩の修行を好む機には六度万行を教えるのである。是は則ち白色の一に於いて青も赤も人の好みに従つて染めるのと同じ。法華経は諸経の根本なので首題の蓮華は白色である。

* 以下 (16) ↓ (23)

<p>〔25〕真言心諸尊 三昧耶、蓮華上月 輪圖也</p>	
<p>A、真言の心は諸尊の三昧耶は蓮華の上に月輪を図す。月輪中に種子を顕す。 B、一尊の曼荼羅に月輪中に蓮華を図すものがある。観音は蓮華部の尊形である。仍て妙法・観音一体の義を顕す。 C、真言の深秘に蓮華部の時は観音中台と爲し、釈迦弥陀などは八葉に坐して因位に下す。観音を能化と仰ぎ、釈迦</p>	<p>i (32)、【和泉式部歌】蓮蓮と胸の蓮を尋ね来て今こそ見つれ胸の心蓮 j (33)、伝教大師御入唐の時、蓮花の因果を以て一家の口決とした。蓮花の種字をア字、尊形は観音、三摩耶は蓮花である。 k (33) 【釈】観音法華眼目異名。</p>
<p>×</p>	<p>×</p>
<p>×</p>	<p>×</p>
<p>×</p>	<p>×</p>

	<p>弥陀等を所化と為すことは因果一如の深旨である。</p>			
<p>〔26〕 經者 一三、 經之事</p>	<p>A、經とは「玄一」梵語に修多羅と云い、聖教の都名である。仏教の通教を經と云うのである。</p> <p>B、「玄一」声仏事を為し稱して經と為す。如来が四弁八音声で宣説するのを經と云う。</p>	<p>A¹ (35)、經とは梵語には修多羅とも修單監、修免樓とも云う。</p> <p>a (35) 修多羅を經と云うに付けて、有翻家の五事がある。</p> <p>b (35)、まず修多羅と云うは、無翻家の意は梵語輕重能賀の不同である。修多羅と云い經と云うは共に梵語で翻名ではない。有翻家の意は經と云うは翻名と云う。天台は有無相違無と積す。</p>	<p>A² (25)、「玄一」經とは聖教の都名である。具に梵音を存して薩多摩陀利素且覽と云うべし。素且覽は同訳には修多羅と云い、或いは修妬路とも云う。修單闡多とも云う。梵音に取つて都鄙の性重楚夏の不同である。</p> <p>a² (25)、有翻家・無翻家の両義がある。梵語は多含にして漢語は単淺なり。單淺の語で輒く多含の語を翻すべからず。唯この語で彼の語に代わるのだ。</p>	<p>A³ (19)、經とは梵語には修多羅と云う。此には多くの翻名が在る。法本とも翻す。三世の諸仏は何も經を以て本とするので法本と云う。</p> <p>*↓E。</p>
<p>×</p>	<p>c (35)、無翻家の五義は、一に法本または出生とも云う。心は仏出世して初めに定の法門を説き、一代の説教を設くる故に法本と云う。是一代</p>	<p>c¹ (25)、是に五義有り。一に法本亦出生と云う。金口所説の一言を本と為し無量の言教を流出するからである。二に微発亦是顯示と云</p>		<p>×</p>

の説法の根本と云う心である。

【金鑽の心源】は仏の経を本として菩薩は論を作り、人師は釈を作る故に法本と云う。

【四教義】出世善本言教の本名為法本。是は初めの義の心である。二に命発、如来の教法を少し聞き成仏の蓮茎を生ずる故である。

【釈】法を聞き傍を生じ地獄に墮すこと恒沙の諸仏を供養するに勝る。法は是遠種と成す故に供養は福田となる故である。三に涌泉如来の言口より教行理の三を顯す事、譬は如泉湧と云々。

【一義】修多羅より文義を出づ。無辺なること泉の涌く如し。四に繩墨とは我等が心は邪曲とて窮るを如来の説法の繩墨をもって直にする事、番匠の墨金にて曲がる木を直になすに譬る。止観には我等心法は蛇形の如し。常に曲がるを筒に入れ、直にす。五に結鬘仏法に於いて教行理の三を整足して相離れざる事、譬は花かつらを結ぶが如し。

う。如来の言辭は巧妙にして次第詮量するに初中後に善にして円満具足する。大海の水の漸々に深く転ずる如し。三に涌泉仏説の文義無尽にして石泉の流潤が如し。四に繩墨巧匠の斧の下、先ず墨繩を引いて是を削るが如し。仏の説法を聞いて見の邪教を裁量する。正轍に入るを得る。五に結縵仏の説に結ぶこと行理を教じ花鬘を結んで零落させざる如し。

d (35)、無翻家の五義とは、修多羅は梵語一字含千里の功德である。漢語は此土單議の言なので、争か單議を以て多含の梵語を翻すべきか。仍て物の名は所に随つて替わる故に、西天では修多羅と云うを此にては經とも法本とも云い替わるのである。

e (35)、【歌】草の名も所によりて替りけり難波の蘆は伊勢のはまをき

f (35)、有翻家の五義とは、一に由とは、三世の諸仏出世して所被の機縁に随つて説す。所被の機に通ると云う事である。二に契とは、契機契理故云契經文。如来の説法は能く機に契うと云う心である。能所の意有るべし。能化に約せば、無尽の根機に相叶う大小半滴の教を施設するなり。所化に約せば、如来の教に預けて修行し終に所詮の理に契う。三に線とは、ツラナルと読む。教行理の三を連ねて説法する故に線と云う。或は縦とも云う。是をイトスチと読む。糸筋の乱れざる如く、如来の説教は教行理乱れざる故である。四に

f' (25) 有翻家は、西天漢は其の言音替わると雖も義理に於いては通るとして翻訳する。また五義がある。一に修多羅を翻じて經と為すは由の義である。聖人の心口に由て一切出世の義が出来するからである。また經は緯の義である。世の絹の夕テヌキを以て織るは、龍鳳の文章を成すが如し。(↓D) 二に契と翻ず。如来の説説、機に契う義である。三に法本と翻ず。四に縦(イトスチ)と翻ず。教門の理を貫穿し零落せざる義である。また縦は縫の義である。言教を縫つて章句で次第するのである。五

<p>C、六塵為經と三塵為經（声・色・法）が有る。在世には直に仏の聖教を聞く故に声塵為經である。色の經卷はない。滅後は色塵為經である。黄紙朱軸の經卷は色法の故である。実は法塵為經である。仏教を習い經卷を学んでも衆生の開悟がなければ、只世俗の言語である。衆生が得益し得脱を開く事は心法の領納意識</p>	
<p>a (36)、六塵を經と云う事は、六根に六塵の説法あり。是を經と云う。</p> <p>b (36)、【釈】他土余根皆利此土耳根利故偏用声塵と云う。この界は耳が利なる故に声塵を經と云う。声仏事を作す、称して經と為す。是も風輪所成の国であ</p>	<p>法本。五に善語。如來の説法は皆善語である。七仏通戒偈に諸惡莫作諸善奉行。この五義と意は譬は全体は翻せざれども一分一分をもその義を顯すは翻すべきである。</p> <p>g (35)、【一義】有翻・無翻共に、由と法本とを除いて何も經とは經緯なりと云う義を制するのである。</p>
<p>C₁ (27)、尋常の人は黄卷朱軸色の經卷計を經と思う。一家は六塵譬の經と釈す。目等の六根色等の六塵の境を縁じて開悟すれば、何物も皆經である。</p> <p>【決二】支仏が飛花盤特が掃帚並是託る事頭理の明文なりと釈す。</p> <p>c (28)、衆生は三塵を</p>	<p>に善語教と翻す。</p> <p>h (25)、【私】有翻家・無翻家と言う事は、修多羅の一語に限らない。一切の梵語に翻する異義である。</p> <p>i (25)、梵は清淨の義である。仏生国の言なので梵語と云うか。貴顕の人民は皆国常立尊の嗣族なるが如し。</p> <p>j (25)、漢語と云うは仏教漢の代に始まりて來る故である。例は日本に仏教來ること異国より來る故に専ら吳音を用いるが如し。</p>
<p>x</p>	

<p>の分別から起る。故に法塵 為經である。</p>	<p>D、【玄二】(二処釈) 經は經緯 義である。タテヌキと訓じる のである。譬えば世間機を織 るに經緯で色々の文を織り出 す。仏の説教を經(タテ)と し、行者の修行を緯(ヌキ) として衆生得悟の文を織り出 すのである。開悟得脱でなけ れば經と名付くべきでない。</p>
<p>る故である。</p>	<p>D₁(34)、經とは經緯 の義である。一代の經教 をタテヌキとして衆生成 仏の綾を織り出すのであ る。【一義】如来の説法 はタテ、所彼の機はヌキ、 成仏の種字は文の如し。 具さには妙法蓮華經緯と 題すべきである。</p>
<p>經と為し、一には色塵 在世の菩薩声聞金口の 演説を聞いて得道する を信行機と云う。二に 法塵内に自ら思惟して 心と法と合して他の教 をも由さず、紙墨にも あらず但自心に曉悟す 法行の機である。三に 色塵仏世を去り後、經 墨伝転する。中にも只 耳根利故に偏用色塵と 釈す。</p>	<p>D₂(25) 經は緯の義で ある。(↓C、f)</p>
<p>D₃(19)、經とは經緯 の義と釈す。タテヌキ と訓ず。譬は機を織る にタテヌキを以て色々 の綾を織り出すが如 く、仏教をタテとし我 等が修行をヌキとして 仏果の錦を織り出すを 經と云う。</p> <p>^a 【歌】經と云う其の字</p>	

×	
×	
×	
	<p>に五時の糸はえて織り出す布は四教八教</p> <p>b 【山王院大師】一念をタテとし三千とヌキとして万法を織り出すと判ず。行者の一念はタテ、三千万法はヌキである。行者一念のタテと三千諸法のヌキを寄せ合わせて一切の義理を織り出す。</p> <p>c、定とも翻ず。座禪入定して一切の義理を思惟し、禪定の内証より立ち諸教を説く故に定と云う。</p> <p>d、禪宗門では、經教は方便なので、月を指して彼岸に至る船筏と云て実義にあらず。天台の心は、教観本より不二なので、観の外に別に教はない。指を捨てて月を見ようと向かい、船筏と彼岸に至ると思えば浅近なり。指がその儘月、船筏が即彼岸である道理と知らないからである。修多羅の外に実理を</p>

<p>E、【一处釈】經は常不變の義である。常住の義である。これは仏教の不思議にして金剛不壞なれば天魔破せず。波旬侵さず。常住であるのを經と云う。</p>	
<p>E₁ (34)、根本大師は經とは常なり。天魔波旬も犯さざる故である。又は不改の義である。</p>	
<p>E₂ (26)、經は常と訓ず。仏法は天魔外道破壊すること能わず、湛然として不動だからである。 a (26)、或は又、三世諸仏の出世は留々に替わると雖も大小の教法権実の両道は常住なる</p>	<p>尋ねれば、經がそのまま法体にして実義である道理をよく知るべきである。 e、巻軸を定る計を經と思うべからず。万法本来なる処を經と云う。 【玄八】手に巻を執らず常に經を読み口に言色無く遍く衆典を読む。仏説法せず常に梵音を聞く。心思惟せず普く法界を照らす。学問豈に実ならざるや。</p>
<p>E₃ (19)、【天台釈】經は常と訓ず。聖の心口に由る故と判ず。この文の心は、經と云うは常住の義と釈す。その故は釈尊は靈山の雲に隠れると雖も残る物は阿難結集の經である。人々皆此の經を信じて</p>	<p>f、【山王院】教は本無造無作にして六塵に漏じ常恒なり。常源と無始無終にして三世に亘るも不變なり。</p>

<p>F、上の五字（妙法蓮華經）を真言秘教に約すとアピラウンケンの五字、地水火風空の五大五智円明の内証である。</p>	
<p>a (44)、妙法等の五字を表示する事。仏果に約せば五智五仏五如来である。</p> <p>F₁ (44)、教に約せば五時、真言に約せばアピラウンケンの五字、天地に約せば地水火風空の五大である。</p> <p>b (44)、我等は胎内胎外の五位、凡夫に約せば六根が五度に転じて成仏する。</p> <p>c (44)、妙法等を尊形に習う時、妙は心王、法は心数、蓮花は胸中</p>	<p>×</p>
<p>F₂ (19)、首題の五字の沙汰はかくの如し。仍てこの五字は真言密教に約せばアピラウンケン。五字は我等の色法に約せば五大である。即ち五智円明の内証である。</p>	<p>が故である。</p> <p>b 【孝經】經は常なり。 * (27) ↓ (26) C</p> <p>受持誦誦解脱書寫して仏果を求める故に如来の仏法今に絶えず有る。常住の義である。</p> <p>c、經と云う字をツネと読むのは此の故である。</p>

〔27〕付妙法題号
通号別号云事有之

<p>〔27〕妙法の題号に通号・別号 ということがある。</p> <p>A、妙法等の五字は通号、序品 ・方便品等は別号である。</p> <p>B、羅什存略の經は二十八品に 亘り妙法蓮華經の題号を置く こと不審であると難じること があるが、妙法の方便、妙法 の譬喩の事を顯すのである。</p> <p>C、【釈（記一）】品品内に具体 等を減じ、句句下通は妙名を 結び、一部始終並びに一妙法 の功德であることを顯すので ある。</p> <p>D、通体・別体と云うことがあ</p>	
<p>A₁（14）、題号に通号 と云うは首題の廿八品 に亘るを云う。序品乃 至勸発品と各々なのは 別号である。</p> <p>a（14）、妙法蓮華の四 字は通号の内の別号で ある。法華に限るから である。經の一字は諸 經に通じるので通号の 内の通号である。</p> <p>b（15）、題号に五重が ある。一は唯法題法体</p>	<p>の肉団、經は息風であ る。</p> <p>d（44）、我等が座する 所がさながら五字の体 である。我等鎮に蓮花 為座の法行を振舞と云 うのもこの意である。 是は行位の分である。</p>
<p>A₂（16）、題号に通別 有り。妙法等の五字は 通名である。序品乃至 普賢・勸発と云うは別 号である。</p> <p>a₁（16）、通について 又通別を分別する。妙 法蓮花は別、經の一字 は通である。その故は 妙法蓮花の名は今の經 に限り、經の一字は諸 經に通じる故である。</p> <p>A₃（25）經事。五字中</p>	

×

<p style="text-align: center;">×</p>	<p>る。通体は円融三諦である。三諦は經体の中道、經体の沙汰は十如是義の一の疑である。別体と云うのは品品各別体である。</p>
<p>a (37)、法華經を諸經の王と云う事は、諸經の中にこの經第一である。民の中には、王を以て主とするのでこの經を王に譬えるのだ。</p> <p>b (37)、難じて云く、十宗八宗共に我が宗の依經を王と云うのではないか。義に云く、我家の仏、我家の教なので王と云うのだ。天下に殿と云うのは、摂政閔白殿に限ると云っても我々が主を殿と云うようなものである。</p> <p>c (38)、天台宗の依經に、教門の時</p>	<p>ばかり挙げる故である。二に唯譬題譬ばかり挙げる故である。三に譬前法後題金剛般若である。四に法前譬後題法花の首題である。妙法は法体蓮華は譬である。五に譬法兼含の題、今の經の題である。是を複題とも云う。</p> <p>* (16・17) ↓ (15) D</p> <p>において通別を分け、妙法蓮花の四字は別号、經の一字は通号である。</p> <p>* 以下 (25) ↓ (26)</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	<p style="text-align: center;">×</p>

は、今經に依て宗を建立し、実義の時は音声為仏事と云て、音声の体を經と云うのである。この經とは出入の息である。これは觀門の意である。必ず出入の息が法華經の体である意は、法花の体広しと云うとも妙法の二字は遇わず。我等が心念の二法が一經の始終なので妙法である。

d (39)、題に單題具足の題と云うことがあつた。單題とは、法でも人でも一だけを挙げる事を云う。般若等は單題である。仁王經に仏說仁王護国と云つて人の方だけを挙げる。具足の題は、法と人と譬とを各々具足して挙げる。

e (40)、妙法等の五字は淺に從、深に至る。妙法は法体、蓮華は譬喩、經は教相分別の故に尚劣る。余經に勝て從果向因を顯ずる。余經の題には仏說の言を置く。今經に置かざる事は、余經は能所各別機法已分の故に仏說と説き、今經は機法未分の故に直に法体を置いて仏

説とは置かないのである。

f (41)、五字を五重玄に習に、妙は名玄義、法は体、蓮華は宗、経は用、上四重に分別するは教玄義である。

g (42)、首題に七仏の所説替わる。

毘婆尸仏は法妙蓮華經、尸棄仏は心本蓮華、毘沙浮仏は道行蓮華經、クル孫仏は供養蓮華經、俱那含仏は白法蓮華經、迦葉仏は清淨蓮華經、釈迦は妙法蓮華經と題する。

h (43)、序品で妙法等と題する事は不審である。仏は無量義処三昧の定に入り、弥勒は疑を發し、文殊は燈明の往事を引き答えるので、方便品に至って始めて妙法等の言を置くべきではないか。(答) 誠に在世では序品の時に二聖の間答までにして妙法の言は無い。しかし阿難結集の時、妙法と題して末世に流布させた。題号に妙法の言が無ければ無名無実の經となる。所詮序は仏意の内証なので、一機に下らず重なのでこの内証を挙げて

妙法と題するのである。

* (44) ↓〔26〕

i (45)、首題を諸仏の内証、衆生の心法と云うに、五字風喘氣息の四つに習う時、妙は息の位である。これは心法である。出入に及ぶイキを息と云う。法は風の位である。外に出る息である。蓮華は喘の位である。これは胸の間に有る息である。蓮華と云うも己心八分の肉団である。経は氣の位である。諸仏衆生の間には心法が体で一切衆生の事を振舞う。法花も首題の体で上の周辺を廿八品を置く。

j (46)、【山家積】一乗の独円は知り難し。この鏡像円融を法花の首題に習合する時、妙法は境の鏡、白銀真円の鏡である。蓮華は智の鏡、赤銅八葉の鏡である。

k (47)、首題を一面、二面に相伝する時、妙法蓮華經と一言に唱えれば一面である。觀法に約せば一言の一心三觀である。

l (48)、本門の十妙について、本感

応とは、雨降り地を潤し、千草を生ず。また九夏三伏の熱い日は冷風来て熱を除き、玄冬龜節の寒い日は、日輪の光用來て寒を防ぐ。

これは天然の成応である。

m (48)、本神通とは「玄一」蜘蛛に懸かる時は喜事来る。乾鶴が鳴く時は行人来る。或いは龍が吟ずれば雲が起き、虎が嘯く時は風が吹く。各々己分の神通である。

n (49)、今経は経に一文、釈に一文を大綱として無尽の義を成るべきと云う事がある。経に一文と云うのは首題の五字、釈に一文と云うのは品々の内威具体等句々の下通結妙名の文である。

n (49)、難に云く、通結妙義と釈すのはどういふことか。義に云く、今の経は一字一点も由無きことは許されない。道理を存して句句の下通結妙名と釈す。

o (50)、経に開結二経を釈迎の三尊に習う時、無量義経は文殊の智慧である。内証一心の本法より無量

を出生する。文殊の智徳である。
八軸は釈迦の体境智不二の心である。二仏一基の塔に並び座す。普賢の理体を見る事を説く故に普賢である。